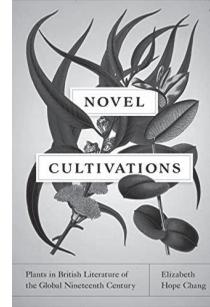


書評

Elizabeth Hope Chang,
*Novel Cultivations:
 Plants in British Literature of the Global
 Nineteenth Century*
 (University of Virginia Press, 2019)



金子 幸男

「地面に足で固定され、頭には脳がなく、口で話すことも目で見ることでもできず、賞賛されて誇りに思うことも、面倒をみられて感謝することも、殺されることを恐れることもない」。これはラスキンが、未完の植物研究書 *Proserpina* (1875-86) で「植物とは何か?」という問いに対して答えたものである。この本質的な問い、さらには「植物に意識はあるのか、植物は考え、感じるができるのか」という問いが本書の通奏低音をなしている。

イギリスの植物というのは、イングリッシュ・ガーデンのイメージがあるので国内種ばかりだと思っていたら、1839年には外来植物が18,000種もあったそうである。ヴィクトリア朝の人々の周りに存在した植物が実は外国から輸入された草花だったのである。つまり「イギリスの自然」はグローバルな起源を持つのだ。19世紀イギリス帝国は南アメリカ、アフリカ、アジアへと拡大のさ中、人間とともに植物も動いていたことは当然予想できる。プラントハンターが異国の珍しい植物の種苗を世界中に探し求めた結果、貴族の庭園やキュー植物園等を潤していたことは、川島昭夫著『植物と市民の文化』(山川出版社)、『植物園の世紀』(共和国)、白幡洋三郎『プラントハンター』(講談社)に詳しい。

本書はイギリス帝国の成長、植物栽培の台頭、世界的な植物交換の広がり背景にして、植物の移動と植民の動きをアナロジカルにとらえながら、19世紀英国のジャンル小説における植物が、登場人物や自己(self)の可能性をいかに媒介するか、植物の語りの可能性を探ったものである。ここで

ジャンル小説とはリアリズム小説と区別して、探偵小説、ゴシック小説、科学ロマンス、スパイ小説、ユートピア小説、冒険小説などをさす。小説に描かれる植物を参照点にした目的は、異国趣味、外国性、自己、主体の問題を探求するためだ。人間の植物に対する愛情と嫌悪から、それに応じた植物の主体が立ち上がり、好意や悪意を返し、関係を主張し語りにも影響を与えるのだ。本書が扱うのはヴィクトリア朝中期からエドワード朝にかけて活躍した小説家とノンフィクション作家である。

植物の意識に敏感な本書は、栽培 (cultivation) にも心を配る。著者によれば栽培とは植物が何であり、何をすることができるのかを知覚し解釈する仕事であり、語りを豊かにするものである。植物は、小説において、感覚、移動、倫理、再生、表象、比喩についての考えを広げ、深めてくれる。植物が虚構世界の語りの中で紹介される時をとらえたい。語りがオーク、ランなど植物を眺めるために休止するとき、つまり通常の語りの仕事からの隔たり (gaps) または中断 (breaks) が生起する瞬間に目をとめ、これを意味を生み出す機会をとらえよう。これが著者の作品分析の方法論だ。

第1章: Detecting the Global Plant Specimen では、探偵小説における栽培された花を扱う。とりあげられる作品はコリンズ『月長石』とコナン・ドイル『海軍条約』である。二つの探偵物語では植物を見るという行為が新たな発見を促す。

『月長石』における医者助手エズラ・ジェニングズは、月長石の窃盗の経緯を明らかにする情報提供者であるが、植民地の生まれ育ちで父はイングラント人だが母の出自は不明という、人種的にハイブリッドな人物。生垣に咲く野生の花を摘み、花束にすると彼は彼方の植民地風景を想起し、植物がグローバルな現象であることが分かる。ホームズの「海軍条約」は外交文書窃盗事件で7つの手がかりがある。その一つが、ホームズが窓際で手に取る松葉牡丹である。植物は手がかりとして機能し、植物の意識への接近が可能となるのは、擬人化した仲介者なしに、ジェニングとホームズの夢が植物の提供する情報の代理をするからだ。人間の思いは見ている植物から反映されてくるものなのだ。

第2章: Strange City Gardens では、Bronte, *Villette* (1853)、Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (1890) を都市ゴシックの形態として扱う。都会の庭に

育つ植物は非人間的な意識が入り込むゴシック的空間を提供する。

『ヴィレット』の例を眺めてみよう。学校の庭はゴシックの監視の中心であり、梨の木の下では中世に若い修道女が生き埋めにされたという幽霊伝説が残る。このゴシック仕立ての中でルーシーは自己形成を行う。庭と植物がルーシーの語りに参加。探偵物語と同じように、植物が人間の観察者から語りを引き継ぐ。自己形成を促すのは庭であり、庭を回復させることでゴシック的な制約から逃れられる。恋人のポールが西インドへ行く別れの日が近くなると、公園の木立に身をひそめ悲しみをこらえる彼女の意識は木々に属する。物語の始め、木々や花々が壁の中に閉じ込められていたが、ゴシックの力が解除され、植物が重要性を帯び、人間と植物が共謀する。ポールが西インドからの帰路、船が嵐で遭難した後も、ルーシーは彼が好んだ庭の世話を続け花々は開花を繰り返す。これは都市にある庭の空間の回復物語である。

第3章：Strange Country Gardensでは、カントリーハウス小説を通してグローバル化する庭園、庭園が同化する植物標本、庭と植物が象徴する地方的、世界的な布置を考察する。少女と女性は植物、花とイコールであり、プロットは地所の相続における家庭の暗い過去とグローバルな未来の和解であり、庭園の植物学的な文化変容 (transculturation)、異種混交を扱う。主として扱う作品は、Rider Haggard, *Colonel Quaritch, V.C.: A Tale of Country Life* (1888)、Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (1911)、Daphne du Maurier, *Rebecca* (1938) である。

F・バーネットの『秘密の花園』を例にとろう。植民地インド帰りの孤児メアリー・レノックスが田舎の叔父のお屋敷で秘密の庭を発見、豊かな花園へと変える栽培行為を通して植物とともに自身も成長していく。著者によればメアリーも庭も異種混交的であり、イングリッシュなものではない。花園の知覚には複数の視点を設定し、メアリーら人間以外にコマドリや植物も庭を知覚する。コマドリは庭の鍵のありかを教えてくれた。メアリーが雑草取りの際、庭の地面の中にある球根は、息がつけると喜び、活動的になる。叔父のアーチボルド・クレイブンがアルプスで忘れな草に出会い、心が浄化され、ヨークシャーへ戻り、疎遠だった息子コリンとも仲なおりし、二人は花咲く秘密の園の中に溶け込んでゆく。このアーチボルドの救

済というサブプロットは花による人間の育成を示唆している。

第4章：Acclimatization Abroadの焦点は植民地の木々である。そこが自己を生成する場所であり、冒険物語や入植者物語の中で自己が生成される。南アメリカのウチワサボテン、オーストラリアのユーカリのような木々は、イギリス帝国内の人々の移動に伴って循環するのであり、新しい環境に移植され順応していくのである。本章では、南アフリカを舞台とする Olive Shreiner, *The Story of an African Farm* (1883)、H・Rider Haggard, *Jess* 及び *Allan Quatermain* (1887) 等、北インドの森林地帯を舞台とする Kipling の “In the Rukh,” (1893) (*Jungle Book* 中、Mowgli の人生の終わりを扱う物語) を主に扱っている。

『アフリカ農場物語』では、世界を冒険者のように動き回る、よそ者の侵略的なウチワサボテンを、登場人物の異種混交的な植民地アイデンティティと同等のものともみなす。農場近くの丘の上に立つウチワサボテンは人間の精神的成長、苦しみに満ちた生を見守る植物の参照点となっている。『二人の女王』(*Allan Quatermain*) では、アラン・クォーターメンの一行はアフリカ奥地へと向かう途中、マッケンジー宣教師一家に出会い、夫人のイングリッシュ・ガーデン(バラ、クチナシ、カメリアなど)と娘フロッシーが周辺から集めた土着の球根から作った庭に感動する。アランは Goya Lily という貴重な球根をフロッシーのおかげで手に入れる。球根は彼女のアフリカ性を指示し彼女の異種混交性を際立たせる。フロッシーは「野生のイングリッシュネス」を具現、入植者の同化のモデルであるとされる。

第5章：The Sentient Specimen Returns は事実上の結論部で、植物は考え、感じ、移動できるのかという本書の関心を、対象となる時代の植物をめぐるノンフィクション言説とフィクションの中に探っている。チャールズ・ダーウインの息子フランセス・ダーウインは王立科学協会で1908年、植物には我々の意識のかすかなコピーが存在すると述べている。これは当時植物の思考を示唆する言葉が科学の言説でも多用されていたことの表れである。考え感じる植物を仮定すると個性の問題が出てくる。L.M. Montgomery, *Anne of Green Gables* (1908) では、室内のゼラニウムのまなごしのやさしさを感じるアンがその名前を養母に尋ね、生物学的分類学上の名前とこの世にただ一つだけの個性ある植物の名前の区別

という問題を提示する。植物の眼差が敵対的なものもある。ハガードは食虫植物であるモウセンゴケを例にあげている。本章で紹介されるフィクションには、恐怖と悪意を感じさせるホラー的な短編が多い。Conan Doyle, “An American Tale” (1879) ; Phil Robinson, “The Man-Eating Tree” (1881) ; Frank Aubrey, *The Devil Tree of El Dorado* (1897) ; Fred White, “Purple Terror” (1899) には、人間を食べる悪意ある木々が登場し、海外植民地産である。海外に安住できない悪意ある植物がイギリス国内を侵略する逆植民地化を描いた作品が、H.G.Wells, *The War of the Worlds* (1897) であり、トライポッドとともに悪意あるものとして、赤い雑草 (Red Weed) が描かれている。赤い雑草は意図的な動きの背後に、脅威となっている異星人の意識の存在を推測させる。他に無限に増殖する真菌の恐怖を扱った William Hope Hodgson, “A Voice in the Night” (1907)、John Uri Lloyd, *Etidorhpa* (1895) がある。Algernon Blackwood, “The Willows” (1907) は二人の旅行者がドナウ川で犠牲にされかかる話で、心霊能力をもった人を操るヤナギが住む島が登場する。A. Blackwood, *Pan's Garden: A Volume of Nature Stories* (1912) という短編集に入れられた “The Transfer” は、郊外の庭の不吉な何もない一画が人間の実業家から生命力を吸い取る話である。また、“The Man Whom the Trees Loved” は、元インド森林局勤務の老人がハンブシャーのニューフォレストの森林に取り込まれて融合していく話である。

この本の大胆な試みは、今でも人気の高いヴィクトリア朝の反リアリズム小説を読みながら植物の思考に与えられた空間を語りの中に探すことであった。これはとても斬新なアプローチで、しかも扱っている作品も広範囲におよび、ノンフィクションもカバーしている。擬人法としての植物なら、児童文学でもしばしば巡りあうが、そうではない方法で植物が存在を主張してくる場面があるのではないかと著者の着眼点は独創的で高く評価できる。ただ一つ残念なのは、文法の不正確さや文体のバランス感覚が欠いているところが散見され英語が難解となり言わんとするところが伝わりにくくなってしまったことである。結局著者は植物に意識があると考えているのかどうか、それは分からずじまいであった。

— 西南学院大学教授